
■ 2022年度前期科目《ジェンダー論入門》 ■

「「闇」から見るジェンダー —— 森崎和江『まっくら』を読む」

担当教員：村上 潔

第3回（2022/05/06）文書資料

●● 導入 ●●

【このコーナーでは、各回、授業内容と直接関係はないが——間接的には関係する——、担当教員が現時点で注目している情報を随時ピックアップして掲載していきます。授業内で言及する場合がありますが、言及しない場合もあります。取り上げる内容に、特に統一性はありません。各自、興味・関心と必要に応じて参考にしてください。もちろん読み飛ばしても問題ありません。☆このコーナーの内容は定期試験の出題範囲には入りません。☆】

■ 時代背景の基礎的理解のための初学者向け映像資料（教材）

◆ NHK Eテレ（教育テレビ）

◇ 10min. ボックス 日本史 [10分]

| 「高度経済成長の光と影」

[https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?](https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005120376_00000)

[das_id=D0005120376_00000](https://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005120376_00000)

◇ NHK高校講座 日本史 [20分]

| 第39回（第5章）：「現代の世界と日本——国際社会への復帰と高度経済成長」

<https://www.nhk.or.jp/kokokoza/tv/nihonshi/archive/chapter039.html>

◇ クリップ映像

| 日本のエネルギーと鉱産資源 [01:58]

https://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005403180_00000

◇ NHK for School

<https://www.nhk.or.jp/school/>

* 「高度経済成長」・「公害」で検索

■ 炭鉱労働をテーマにした代表的な劇映画

◆ 『にあんちゃん』（日活/1959）

（監督：今村昌平/脚本：池田一郎・今村昌平/出演：長門裕之・吉行和子ほか）

<https://www.nikkatsu.com/movie/20390.html>

* 炭鉱シーンのロケ地：長崎県北松浦郡福島町（現：松浦市）

■企画展

◆企画展《彫刻刀が刻む戦後日本——2つの民衆版画運動》

◇「「版画の迫力 感じて」——国際版画美術館で企画展」（『タウンニュース』町田版2022年5月5日号）

<https://www.townnews.co.jp/0304/2022/05/05/623736.html>

—“同館学芸員の町村悠香さんが「日本の義務教育の中で版画を作ったことがある人は多い。なぜこんなに多いのか」ということに着目して企画した。”／“明暗表現が作品のメッセージ性を強調することに心を打たれた戦後の日本人の様子や、1950年代～90年代の全国の児童・生徒らが手掛けた地域の様子を描いた作品、青森や石川、神奈川などで共同制作された大型作品など、約400点に及ぶ作品と抱負〔ママ：「豊富」の誤記か〕な資料が、開発と発展だけでない日本の戦後を映しだしている。”／“学芸員の町村さんは「誰もが表現活動をしていたことを思い出してほしい。版画の価値を見直す機会になれば」と話している。”

■企画

◆スポーツと身体

◇《[『アスリートたちが変えるスポーツと身体の未来——セクシュアリティ・技術・社会』（岩波書店）刊行記念] 山本敦久さん×井谷聡子さん×小笠原博毅さんトークイベント》

日時：2022年5月14日（土）16:00～17:30

会場：MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店7F salon de 7

参加条件：無料／定員25名（先着・要予約）

https://honto.jp/store/news/detail_041000063838.html

—“【趣旨文】「アスリートは黙って自分のプレーに徹すればいい」。「アスリートは政治と無縁であるべきだ」。本書には、そうしたスポーツの不文律を破り、支配に対して声をあげる9人のアスリートたちが登場する。だがそうした声は、最初から政治的なのではない。鍛錬を重ねたアスリートたちがベストパフォーマンスを生み出そうとするときに、そこにさまざまな障壁が立ちはだかる。黒人だから、移民だから、女性だから、トランスジェンダーだから、障がい者だからといって十全に競技ができなかったり、排除されたりする。本書のアスリートたちは、最高のパフォーマンスを実現するために従来の常識や規範的な身体に抗う。ありうべき「身体」に収まることなく、競技や発言を通じてスポーツの新たな可能性を示そうとする。資本主義と国家とプライベートの三角形に収奪された現代スポーツのなかに、社会性（ソーシャル）を取り戻そうとするアスリートたちの闘いを考える。”

◆《[Race, Rights & Sovereignty Programme] In the Darkness, New Life Emerges: A Writing Workshop with Martha Adonai Williams》

May 3, 2022 / at Woodlands Community Garden / by The Glasgow School of Art

<https://www.eventbrite.co.uk/e/rrs-in-the-darkness-new-life-emerges-a-writing-workshop-tickets-323940814697>

—“In this writing workshop, we will embrace the idea of the dark as an emergent dream space, as fertile ground, exploring how we can write from our dark places, and to get to know our dark places, perceiving these hidden or forgotten selves not as shameful or scary but as warrens of protection, potential, and creative power.”

■ 記事

◆ フェミニズム理論：ベル・フックス

◇ Nopper, Tamara K., 2022, "Understanding Abolition Through Bell Hooks", New Inquiry, April 25, 2022, (<https://thenewinquiry.com/blog/understanding-abolition-through-bell-hooks/>).

—“【Exordium】 bell hooks might not have described herself as an abolitionist. Others might not as well. I am not preoccupied with proving she was one. What I want to consider is how hooks’s thinking is relevant to abolition, as she grappled with addressing harm, violence, and trauma in non-punitive ways. Here I consider insights hooks offers abolition in her discussions of two topics: confessional writing and healing.”

◆ 気候危機と直接行動

◇ Battistoni, Alyssa, 2022, "Is Sabotage a Pipe Dream?", Verso Blog, April 21, 2022, (<https://www.versobooks.com/blogs/5324-is-sabotage-a-pipe-dream>).

—“【Exordium】 Andreas Malm’s book *How to Blow Up a Pipeline*, with its call for the environmental movement to start sabotaging fossil fuel infrastructure to save our planet, has sparked a vibrant discussion on the left about direct action tactics and eco-sabotage to address the climate crisis. | Verso has put together a free, downloadable ebook of essays, *Property Will Cost Us the Earth*, from activists and writers around the world grappling with the idea of direct action and eco-sabotage, survey climate activism around the world, and argue for the necessity of building a fighting global movement against capitalism and its fossil fuel regime.”

■ 資料集

◆ 《Sexual Assault Awareness Month 2022》（Interrupting Criminalization）

<https://www.interruptingcriminalization.com/survivors>

—“This month, Interrupting Criminalization is sharing resources developed by our team for survivors and against sexual violence. Explore the resource collection and share it with people in your circles!”

■新刊

◆音楽：女性とポストパンク

◇Albertine, Viv [ヴィヴ・アルバーティン] , 2014, »Clothes, Clothes, Clothes. Music, Music, Music. Boys, Boys, Boys.«, London: Faber & Faber. = 20220422
川田倫代訳, 『服 服 服、音楽 音楽 音楽、ボーイズ ボーイズ ボーイズ』, 河出書房新社

<https://www.kawade.co.jp/sp/isbn/9784309291888/>

—“UKパンクロックの伝説的女性バンド「ザ・スリッツ」のギタリストである著者が綴った回想録。常識を覆す音楽活動、そして解散から現在までの波乱の人生など、世界的に高評価を得た作品。”

■特集上映

◆《シャンタル・アケルマン映画祭》

2022年4月29日～ 於：ヒューマントラストシネマ渋谷

* 近日公開：cinema KOBE

<https://chantalakerman2022.jp>

◇「映画界に革命を起こした女性監督の代表作を日本初公開「シャンタル・アケルマン映画祭」スケジュール決定」

2022年3月31日10:00『映画.com』

<https://eiga.com/news/20220331/7/>

◆《ジャック・リヴェット映画祭》

* 2022年6月4日～：cinema KOBE

<https://jacquesrivette2022.jp/>

◇「ジャック・リヴェット映画祭」予告編

<https://youtu.be/KawtFHgdnJk>

~~~~~  
~~~~~ ↑以上：導入／↓以下：本論 ~~~~~

●● 第3回：「『まっくら』を理解するために（2）

——女性史が「書かれる」こと自体の意義」 [2022/05/06] ●●

■まず／改めて認識しておくべきこと

★『まっくら』のような記録／作品が残っていることは、決して・まったく当たり前のことではない。

◆そもそも「歴史」という枠組みにおいて、女性は、「書かれる対象」でも「書く主体」でもなかった。

◇起こった出来事・事実＝「歴史」ではない

- ◇「歴史」はニュートラルなものではない
- ◇なにが歴史に「なる」のか+誰が歴史を「書く」のか
 - | +いかに歴史は共有され・評価されるのか
- ◇女性の働き：公的に（+私的領域でも）記録される価値を見出されないもの
- ◇歴史を書く主体：専門的教育を受け専門的機関に所属し専門的職務を与えられた者もしくはジャーナリスト=（エリート）男性
 - ↓
- ◇女性の「歴史」は本質的に書かれない→残されない
- ◇女性は「歴史」を書かない・書けない→残されない

◆高度経済成長の歴史：描かれかた

- ◇主体：都市・企業・サラリーマン——「おまけ」でその妻
- ◇働く=【生産】する男性 × 買う=【消費】する女性
 - | 女性労働者の存在の不可視化
- ◇炭鉱労働：本来・実質的に産業展開上の重要な基盤であったにもかかわらず焦点は当たらない
 - | +記録として残され・共有されるのは男性労働者の姿
 - └ cf. 炭鉱労働を扱ったNHKの映像教材
 - ▽「日本のエネルギーと鉱産資源」
 - https://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005403180_00000
- ★炭鉱における女性の存在・労働は二重の意味で不可視化されている
 - └『まっくら』が書かれ・刊行され・読み継がれてきたことの重要性

■「残されない」歴史をめぐるポリティクス

◆社会上のジェンダー区分（【残る×残らない】に対応）

- ◇公×私
 - =外×内
 - =出勤×家内（+地域+パート）
 - =稼ぎ手×補完（「内助の功」）
 - =男×女

◆「歴史」となるか否か

- ◇残る（残される）分野
 - | 政治・経済
 - | 法律・裁判
 - | 軍事・警察
 - | （国家）統治機構
 - | 行政・自治体運営
 - | 選挙

| 住民組織（町内会など）

| 戸籍（日本の場合）

| 医療（近代医療）

↳【前近代的な民間医療では女性医療者が大きな位置・役割（「産婆」など）を占めていた——が近代化によりその存在は「駆逐」され男性独占構造が構築される：それ以降の記録は残され「歴史」となる】

| 学問・科学（のシステム）

| 学校教育

| 企業活動

| 都市の社会構造（人口動態推移）

~~~~~

◇残らない／残りづらい（残されない）

| （日常）生活

| 家計

↳【家計簿／レシート／スーパーの安売りチラシ：当事者（主婦）にとっては深刻な問題であり重要な資料——だが「（男性）社会」からはその価値を軽視され→時に笑われたりばかにされたりする対象】

| ケア

↳【事業としてのケアや、ケア産業の動向は記録される。親族間でのケア（妻→舅・姑）は、なされて当然のこととして記録されない。】

↳【日々繰り返されるケアの行為：している本人はルーティンをわざわざ記録に残そうと思わない——が大きな労力・気遣い：本人の生活をかなり規定している】

| 家事・育児

↳【カリスマ的ママタレや専門家（収納アドバイザー／小児科医など）によるハウツー本＝指南書（＋心構えを説いた本）は過剰にある反面】

↳【「名前のない家事」（<http://www.arsvi.com/d/2019tof.htm#05>）】

↳【個別の（自分の子だけに適用可能な）細かいリアルな対応マニュアルは母の頭の中だけにある】

| 身体性

↳【医療上は問題ないとされ見た目ではわからないが常に抱えている違和感——「なんとなく生理が重い」など：語られない】

| 障害 [ディスアビリティ]

↳【（成功物語として／自伝的に）積極的に語られるものもあるが：一方で「隠したい」・「知られたくない」当事者の意識】

| 感情

↳【「メンタルヘルス」として語るほどでもない心の揺らぎ・うずき・違和感】

↳【強い悲しみや憎しみ：それゆえ人に伝える気になれない】

| 地域的慣習・祭礼・民間信仰

↳【口承伝承】

↳【コミュニティの枠の中で受け継がれる】

| 社会風俗（子どもの間の流行語／人気テレビ番組など）

| 教育機関以外での教育実践

| 企業以外での労働や収益

| ボランティア活動／サークル活動

↳【主婦／高齢者が主体になることが多い】

| 地方／僻地

↳【「廃村」レベルにならないと注目されない】

| マイノリティ（被差別的属性）のコミュニティ

↓

◆「女性」の存在・活動は相対的・総体的に「残らない」領域に属する

◇残ったとしても（男性知識人によって恣意的に切り取られた）部分的なものであること

◇残った記録への「評価」も（男性目線のフィルターによる）恣意的・一面的なものであること

◇女性の歴史は女性以外に共有されることが（ゴシップ的に話題にならない限り）まずないこと

↓

◇重層的な不均衡性が厳然と存在する——ことをまず踏まえる

◆女性の歴史を「書く」——その前に調べる・記録をとる——実践の重要性

◇ごく一部の歴史家の問題意識（：「社会史」）

+危機感をもった「書ける」女性たちの情熱的な活動（：女性解放思想・運動の実践の一環として）

→「女性史」の積み上げ・確立

---